

《報告》

震災障害者の今
——阪神淡路大震災から17年

牧 秀 一*

1 はじめに

「よろず相談室」は、震災直後に避難所で開設された。活動内容は、今後の生活、不安・悩みについて個人的な相談に乗ること、『よろず新聞』を作り必要な情報（義援金の受け取り方、風邪の予防方法など）を毎晩、各部屋の避難者に届け説明することを主な柱とした。避難所解消後（95年9月）の翌年3月からは仮設住宅・復興住宅に出向き、信頼関係を築くことを活動の柱とした。それは「同じ目線で話を聞き」「1人ではない、置き去りにされていない」と伝える訪問活動であり、17年目を迎えた今も続けている。

だが、活動の中で、孤独死、自殺といった悲惨な出来事に目を奪われ、「生きているだけましなのでは……」との思いがあり、震災で障害を負った人々の苦渋の日々を想像出来ず、長い間、「集い」の場を持つことが出来なかったのだと、今、思う。

4年前、Aさんから「12年間背負ってきた悩みを、薄紙をはぐように軽くしていきたい。同じ悩みを持つ人たちが気楽に集まる場があれば……」との提案があった。次の年の3月から毎月1回、「よろず相談室」で当事者と家族の「集い」を開くようになった。参加予定者は、現在21名（当事者15名、家族6名）である。それぞれが生きていく上で抱える問題は違っている。だが、行政からの支援は一切なく「孤立無援」であったことは共通している。当初、皆の表情は固かったが回を重ねるごとに、表情は本当に柔らかくなった。

お茶を飲んでワイワイ話すだけで、心が軽くなっていくという。同じ悩みを持つ人同士だからか、不思議な力だと参加者は一様に語っている。

現在「よろず相談室」の活動は、震災高齢者の訪問活動と震災障害者の集いの二本柱である。震災障害者の「集い」も今年3月で5年目を迎えようとしている。この間に会った震災障害者や家族の問題は複雑で多様であった。だが、そこに共通していることは、『前向きに生きたい』ということであった。震災で中途障害となった人々や、彼らを支えている家族の事を通し、震災障害者の問題を考えていきたい。

2 「震災障害者と家族の集い」を通して
——生き紡いできた震災障害者たち

「集い」は、癒しの場として悩みを打ち明けることの出来る貴重な居場所となってきた。この間に、私は数名の震災障害者の話を毎日新聞の「年々歳歳」に書いてきた。題は「震災障害者に学ぶ」。その記事の一部を掲載し、加えて阪神大震災の後遺症で今も苦しむ医師のこと、ハイチの少女との交流会の様子を書きとめることにした。読んで頂くことで、「集い」の役割や震災障害者や家族が抱えている問題を感じ取っていただくことが出来るのでは、と考えたからである。

① 「15年目に、初めてここで涙を流させてもらえました。家でも涙を流せませんでした。ここに入ってきた時、初対面の人ばかりなのに、

* NPO 法人阪神淡路大震災よろず相談室理事長

なぜか素直に話ができ、自分の弱さを出しても許してもらえ場所だと思ったのです。思う存分涙を流せたのでスッとしました」。

Nさんは、阪神大震災でダンスの下敷きになった。無事助け出されたが、今も足が痛く正座が出来ない。人前では、気丈で愚痴もこぼさないNさんだが、今月初めて震災障害者の『集い』に参加した。

Nさんは、震災から15年目にはじめて同じ悩みを持つ人々と集うことが出来た。

阪神大震災での重傷者数は1万683名。一体どれほどの人が障害を抱えたのだろうか。『集い』の参加者は、全体の一握りにしか過ぎない。多くの震災障害者は、今も「孤立無援」で後遺症と闘っているのである。

震災後遺症で苦しみ悩む人々を放置している限り『震災復興』は遠い。

2009年10月29日掲載

②「何度、神戸大橋に行き飛びおり自殺を考えたかわかりません」。震災で重い後遺症に悩むMさんは言った。実態調査によると、震災障害者とその家族の4割が自殺を考えたとある。震災は一家族に様々な運命をかぶせた。死亡・重傷・障害……。このことが家族に「なぜ私だけが助かったのか」など辛酸の思いを背負わせた。

「震災復興」が叫ばれる中、震災からの15年間は、とりわけ震災障害者と家族にとってどのような歳月だったのだろう。

Yさんは4人家族。3年前に出会った『集い』の仲間励まされ、初めて皆の前で、自分の気持ちや娘への思いを語った。「転居して1週間後に被災しました」「生後2カ月になる娘の授乳のため夜中何度も起き、疲れてフッと寝てしまった時、強烈な揺れが襲ってきました。ベビーベッドに寝ていた娘の上に1番大きなダンスが倒れてきたのです」「娘に外傷がなく、なかなか診てもらえず、やっと診てもらった病院で『脳内出血、頭蓋骨骨折で今日が山です。覚悟してください』と宣告されました。なにがなんだか分からず、衰弱していく娘の姿に、なぜ真っ先に助けられなかったのか悔み、出来れば

代わってやりたいと願いました」。奇跡が娘を救ったが、重い後遺症（身体・知的障害）が残った。現在中学3年生、高校進学を目指している。Yさんは「最近、娘は自分の将来の事を心配ばかりしています。結婚できるのか、料理が作れるのか、親がいなくなればどうしよう……と。自分が生きている間に手助けしたいけど『もしも』『もしも』ばかり考えます。でもこの子の将来を信じて1人で生きていけるように助けていきたいです。本人も徐々に出来ないことも出来るようになって来ました」。

涙を流す母の横には気遣う娘の姿があった。

Yさんのように、子どもだけが震災障害者となった家族が、数多くいる。その子どもたちは今、進学・就職の時期にさしかかっている。震災がなければ順調に新生活を迎えただろう。だが、うまく行かず今も苦しんでいる。このような家族に対し、震災当初から相談窓口があれば、苦しまずともよかったのではないか。

これが15年間が経過した被災地に住む震災障害者とその家族が抱える現実の姿なのである。

2009年12月3日掲載

③「僕が死なずに生かされた理由は、このように伝える役割があったからなんや……」。学生たちに自らの体験を語ったMさんが、学生の感想文を読み発言を聞いた後、しみじみ語った。

Mさんは、喫茶店のオーナーだった。震災で1階が店舗兼自宅だったが、ビルは倒壊。妻と娘は無事救出されたが、Mさんは60cmの狭い空間に閉じ込められた。身動き出来ぬ状態が長時間続き「8～9割あかんやろな」と死を覚悟した。だが、偶然通りかかったレスキュー隊に18時間後、無事救出された。だが、急性心不全・腎不全となりクラッシュ症候群で8カ月の入院を余儀なくされた。今も右手、右足にほとんど力が入らない。しびれがとれず、テーブルをぐるぐる巻きにしないと歩けない。夢だった喫茶店経営、ビル管理会社の経営は諦めざるおえなかった。現在、しんどいけれど夜、警備員の仕事に就いている。

Mさんの胸にずっとつかえていたレスキュー

隊への感謝は、震災から10年後にやっと叶えられた。また、「年末、放送されたドリフターズの番組を見て、初めて心の底からワッハッハと笑うことが出来ました。もう大丈夫です。これから笑えます」と語ったのは、震災から14年目の冬だった。

Mさんが彼らにもっとも伝えなかった事は、行政が震災障害者数を把握していないことだ。それは「行政から忘れられた存在」と同じ意味だった。

Mさんの体験談を聞いた学生たちは、様々な感想文を書き、自分の思いを語った。

Aさん「阪神大震災で神戸は防災に力を入れて教訓を生かしているすごいと思っていたけど障害者の人たちのことは一切触れられていないことや義援金などがなかったことを知って見方が変わりました。元気な体を失ってからの苦労を聞いて本当に辛かったことがよく伝わってきました。この辛さを支えてきたのが“人の暖かさ”であったということは、私もうれしく思いました」。Bさんは「就職先がなかなか決まらず、荒れていた自分が恥ずかしいです」と泣きながら話した。私たちには、次代を担う若い世代に災害のあと置き忘れられている人々の姿や問題点を伝えていく責務があるのだとつくづく思う。

2010年1月28日掲載

④ 「同じ痛みを抱え、今も悩んでいる人に出会えホッとしました。今まで家族にしか相談できなかったけど、話せて気持ちが前向きになりました」。

今年1月、震災後遺症を抱え、今も同じ壊れるような足の痛みに悩まされるOさんとSさんが出会った。初対面だが話は尽きず、あっという間の4時間だった。

Sさん一家は5人家族。Sさんの両脇に寝ていた子ども（3歳と1歳）の上に天井とタンスが落ちてきた。「とっさに両足で天井とタンスを支えようとしたが、身動き出来なくなった。少ししたら、子どもの声が聞こえなくなったんや」と泣きながら話したSさんは10時間後に救出された。意識不明・腎不全の状態ですぐに手術をした。

手術をした。

震災で子ども3人のうち2人が死亡。夫は無事だったが工場は倒産、仕事を失くした。Sさんが救出された2時間後、自宅は全焼。家族の写真や思い出の品の全てが灰と化した。

子ども2人の命と引き換えの災害弔慰金500万円と義援金10万円、見舞金14万円が唯一、一家の糧となった。子どものお墓代にと200万円を貯金。布団、茶碗などを買いそろえ残りを医療費と生活費にあてたが、1年と持たなかった。福祉事務所に生活保護の申請に行ったが、「子供の貯金を使ってしまってください。なくなれば相談しましょう」と却下された。

その一方で、行政は2人の弟を亡くしPTSDになった長男に対して専門家の受診を勧めたが、一向に良くならなかった。閉ざされた心を開いたのは仮設住宅で一緒に遊んでくれた大学生ボランティアたちだった。

当時の行政対応は、実に杓子定規で冷たいものであったと今も思う。

震災障害者に対する国の支援は、災害障害見舞金だけである。これは障害等級1級（両眼失明・両上肢肘関節以上失う・両下肢膝関節以上失うなど）に該当する者だけであり片足・片腕を切断した人への支援はなかった。

今後起こりえる大震災で、現行の支援施策や杓子定規な行政対応であれば、どれほどの人がSさんと同じ運命を背負わされるか計り知れない。Sさんは痛む足をかばいながら歩いているが、最近、後遺症の悪化でいつ車椅子生活を余儀なくされるのか不安を抱えている。

今、OさんSさんをはじめ、当事者間の出会いが少しずつ広がっている。気軽に出会い癒される場が何より必要だとの認識を持つまでに被災地は15年間も必要とした。

2010年3月25日掲載

⑤ 「あの足を……、私の足です。持っていけないで!」。来日中、Aさんは疲れて居眠りしていた時、けいれんを起こし涙をボロボロ流し叫んだ。

Aさん（17歳）は中国四川大地震で校舎の下敷きとなり、片足切断を余儀なくされた。

2年前発生した、四川大地震での死者・行方不明者は約9万人。阪神大震災の十倍以上の犠牲を強いた。その時の震災映像の中で「命をとるか両腕をとるか」と迫られ、両腕を切断した少年の姿が、今も目に焼きついている。

その後、私は、四川大地震で手足を失った人が一体どれほどいるのか、あの少年は今、どうしているのだろうかずっと気になっていた。Aさんもその1人である。

Aさんが通う学校の生徒3,000人中、1,400人が死亡。崩壊した校舎の下敷きとなり、多数が手・足を切断したという。Aさんは17時間生き埋めとなり、意識不明の状態救出された。この時、すでに膝から下は切断されていた。3回の手術ののち左足は根っこから切断された。Bさんは在日中国人の歌手である。故郷が大震災に遭い、多くの人が傷ついた事に心を痛め、全財産を学校に募金した。Bさんは、地震1カ月後四川省の学校を中心に激励コンサートを行った。コンサートが終わった時、男子生徒が「Aさんを病院に見舞ってあげて欲しい」と言ったのがきっかけとなり、病院でAさんと出会った。

見舞いに行くたびに、合わない義足が痛い痛いと言う言葉に、良い技術を持つ日本で義足を作ってあげたいと思ったBさんは、日本の関係者の協力も得、Aさんは義足作りのため来日した。

滞在中、阪神大震災で重い後遺症を持つ人たちとの出会いがあった。中国と日本と国情は違うが、震災の恐怖を体感し、後遺症を背負って生きる人同士が互いを理解し本音で語り合うまでの時間は殆どいらなかった。この時、Aさんは阪神大震災から15年間頑張り生きてきた日本の先輩たちに、二つの悩みを打ち明けたのだった。

つづく 2010年6月24日掲載

⑥ 中国四川大地震で片足切断を余儀なくされたAさん(17歳)と阪神大震災で重い後遺症に今も悩む人たちとの交流会が4月下旬にもたれた。

Aさんは「今、高校2年生となり、人生の曲

がり角になっており、これから生きていこうと思いますが、皆さん、先輩として15年間強く生きてきたコツを教えて欲しい。私には二つの悩みがあります。一つは、残廢者(昔の言い方で一部の人たちが今も使う)と言われ冷たい視線を浴びせられること。もう一つは、地震以来ほとんど眠ることが出来ないことです」と話した。

Cさんは80歳。震災で足の上に壁土が落ちてきて、身動きが取れなかった。60時間後(3日後)に助け出されたが、足には、絶え間なく続くしびれと痛みの後遺症を抱えている。

「今、あなたは震災から2年しか経っていないので、闘いの真っ最中だと思うけど、15年経ったら、私みたいに笑って話が出来る日が来ると思う。まだまだ辛いことが続くと思うけど、何年か経ったら笑って過ごせる日が必ず来ると思うので頑張ってください」と語り、最後に「身体は不自由でも心は不自由ではありません」と励ました。

Dさんの娘は15歳の時、ピアノの下敷きになり、高次脳機能障害になった。自らの幼い時からの持病と、娘の障害を抱えながら必死で生きている。

「私も冷たい視線を感じながら生きてきました。でも、『私は何も悪い事をしていない』と思ってきました。辛いけど引け目に感じることはないよ」と話した。

交流会が終わる頃、Aさんの表情は随分柔らかくなっていった。そこには安心して話すことが出来る人たちが私のそばにいたと感じたからであらう。

四川では、多くの学校が崩壊し、若い命が犠牲になった。同時に、重い後遺症を背負いこれからの人生をどのように生きていけばいいのか悩んでいる若者たちがいる。この様な日中間の交流が、彼らの歩む今後の人生に少しの力となるなら『出会いの場』を持ち続けたいと思う。

2010年7月8日掲載

⑦ クラッシュ症候群になった人は、95病院の調査によると372名。震災から7年後に50名が死亡していた。最近出会ったBさんもク

ラッシュ症候群で2年9カ月間も入院していた。自宅は全壊、開業医だったが閉鎖した。「体も痛むが心も痛む。今まで自立していたのが突然、人の世話なしでは生きていけなくなった。大人から赤ちゃんに戻ったみたいだ。それでも、もう一度自立しないとイケない。なにも悪いことしてないのにね……」と寂しそうに言った。今も、心身の後遺症から解放されず苦しんでいるのだ。Bさんは、「集い」の存在がなにより大事であると認めているが、今も参加することが出来ない。次の集いには行こうと考えるだけで、心臓がパクパクし緊張するのだという。なぜこのようになるのかと思うが、震災の後遺症が体に沁み込んでいるのだから仕方がないと考えている。いつかこの状態を克服出来る日がやってくると希望を持つことにしている。

⑧ 昨年1月のハイチ大地震で片足を失った少女(18)が、日本の震災障害者たちとの交流を願って来日した。外国旅行は生まれて初めてのことである。地震の恐怖は未だ体に残っている。同じ境遇の人たちとの出会いは、楽しみだったが緊張した。今年1月16日、神戸で交流会が持たれた。交流会には震災障害者8名と家族らが参加した。彼女は「どのようにショックを乗り越えてきましたか」と聞くと、娘が障害者となった父親は「震災は強く生きる原点の日となった。過去は変えられないけど、過去を見る目は変えられると思えるようになった」と娘と歩んできた体験を踏まえて激励した。少女は「地震は忘れられないけど、自分を愛し続けます」と答えた時、会場から自然と拍手が……。クラッシュ症候群となったCさんは「世界中に同じ境遇の人がいる。自分だけではないと感じてもらいたい」と言い、3日間生き埋めになっていたDさんは「あなたはこれから長い人生を歩んでいくのですが、神戸で頑張っている私達のことを忘れることなく、お互いくじけることなく頑張りましょう」と励ました。彼女をハイチから招いたAMDAの人たちは、交流会の後、彼女が笑顔を見せ表情が柔らかくなったと驚いた。ずっと固い表情であったが、交流会の後、「私は日本の大学で防災のことを

学びたい。出来れば神戸の大学で……」と繰り返し言っていたという。震災から1年しか経っていないハイチの震災障害者との出会い。国や国情は違っても同じ悩みを持つ人同士のたった一度の交流がこんなにも豊かな出会いとなることの意味は重い。

3 震災障害者とは・・

震災障害者とは、阪神淡路大震災(1995年)が起因で障害を持った人のこと。とりわけ問題となっている点は、社会復帰が困難または出来なくなった人が、この15年間その存在が忘れられ取り残されてきたことである。

なぜ「震災障害者」なのか。それは、16年前の阪神淡路大震災で障害を負った人々の問題と考えているからである。この特異な経験を土台とし、今後起こりうる自然災害で後遺症を負う人々のための教訓としていかなければならないだろう。この問題への解決に取り組まないと、自然災害時の障害者問題の解決への糸口は見えない。

阪神淡路大震災の震災障害者は以下の点で特異性がある。

i : 地域の壊滅

見慣れた家、親しい人を一度に失う。→居場所(住み慣れた場所)がなくなる。

ii : 家族間の問題

同じ揺れによる違った運命を背負う。→ 一生背負う家族の苦しみ

例：5人家族 父：無事だが失職(会社倒産)母：家屋の下敷きとなりクラッシュ症候群で現在、両足が痛む。あと数年で車イスになると医師に言われている。子ども3人：兄無事 2人の弟は死亡。

声 「今も1月17日になると、足音が聞こえるんです。あの子達が帰ってくるのです」

例：4人家族 父母：無事 長女：無事 次女：タンスの下敷きになり脳内出血・頭蓋骨骨折。奇跡的に助かったが重い知的障害を抱える。

声 「あと2秒あれば助けることが出来たと思うのです」

iii：当事者の喪失感・取り残され感

例：長期入院（2年9カ月）大阪の病院→この間に街は復興、帰ったら住み慣れた場所に人も家もいなくなっている。自分だけがケガと闘っている⇒孤立感・取り残され感⇒社会復帰が困難になったり出来なくなった。

声 「仕事を失くし、家を失くし、身体も1人で自由に動けなくなり、心も折れた」

iv：「生きてるだけまし」

多数の死者の影に隠れ、震災で障害を負った苦しさや辛さを訴えることが出来なかった。震災当初から、「生きてるだけまし」と言われ、思われ、見られ、忘れ去られて、悔しい思いを10年以上抱えてきた。⇒震災障害者が生きる苦しみ・痛みをみんな忘れていた。

v：人間の尊厳が奪われてきた

16年前の震災で障害を負い社会復帰が困難になったり出来なくなった人々を、私たちは15年間置き忘れてきた。

vi：訴えていく相手がいない

自然災害を起因とする後遺症ゆえ、多くの人は我慢するしかなかった。

一方、「震災障害者」から「障害者」として生きていく時は、必ず来ると思う。私は「震災」という原因で障害を負った人々に、既存の障害者施策の中で埋められない支援をすべきだと思っている。ただ、ずっと「震災障害者」としての支援を受け続けるべきではないだろうとも考えている。震災で中途障害となり、苦しい日々を過ごす人々が、前向きに生きることが出来るようになれば、（行政や周りの人たちの支援が必要不可欠だが）その時、はじめて「障害者」として生きていく必要があるのではないかと思っている。

いくらお金をもらっても、中途障害者（失った腕は戻らない）として障害をずっと抱えて生きていかねばならない現実がある。長い時間を必要とするだろうが、障害を抱えて生きること前向きになれた時、大卒は既存の施策で頑張っていく必

要があると、私は思う。

IV：今、見えてきたこと、何が必要であったのか、今後何を必要とするのか

① 兵庫県・神戸市調査による「震災で328名が障害者」の意味。

これは「調査対象者」を身体障害者手帳交付申請書から特定できる震災障害者とし、「震災障害者の定義」として平成7年1月17日震災当日において、家屋の倒壊等により外傷を負い、それが直接の原因となって身体障害を生じ身体障害者手帳の取得に至ったものとした。

なお「調査対象の特定」として被災地内で障害を受けた者で、身体障害者手帳交付申請書添付の医師の診断書・意見書で、疾病・外傷発生年月日が「平成7年1月17日」となっているか、又は、障害の原因が「震災」となっているものを抽出とある。すなわち、身体障害者で、原因が「震災」と明記されている者または発生年月日が「平成7年1月17日」と記載されている人のみの数字である。

従って、対象者の幅が狭く、328名の中には、知的障害・精神障害となった人は含まれておらず、県外に居住する人も含まれていない。また、私が知っている次の4名の震災障害者もこの中に含まれていない。埋もれている震災障害者がいかに多いかを示している。

i：自宅が全壊、タンスの下敷きとなる。5時間後に救出される。1種1級の身体障害者。現在、寝たきりで1週間に12人のヘルパーの世話になっている。

ii：自宅が全壊、2階の下敷きとなり、両下肢全廃。1種1級の身体障害者。現在、車イスで震災復興住宅（被災者のための公営住宅）に住む。

iii：自宅が全壊、子どもが建物の下敷きで死亡。自らも片足切断を余儀なくされる。

iv：家の下敷きで、クラッシュ症候群。役者を目指していたが断念。現在、大阪で住む。

兵庫県が発表した「328名」に入っていないこの4名の人たちは一様に「悔しい」と言った。診

断書に「圧迫」と記載されていたり「1・17」と記載されていないためである。

② 実態は2千名を上回る

神戸市は5年に1度、市内在住の障害者に対する「生活実態調査」を実施している。2010年3月、身体・知的・精神障害の全ての人に障害原因を尋ねた。その結果、2.8～3%の人が「震災」と答えた。単純計算すると2,700名となる。

また、阪神淡路大震災での重傷者（1カ月以上の入院）は1万683名。このうちの4分の1（2,500名）が後遺症を持ち、障害者となったとしてもおかしくないであろう。

生活実態調査と重傷者数から2,000名以上と言っても過言ではない。

③ 兵庫県・神戸市の実態調査から見えること

2011年1月に発表された328名へのアンケート調査結果は、次のような結果となった。

現在の年齢60歳以上73.8%、1人暮らし22.4%、働いている23.7%、年収200万円未満27.9%、同居家族の被害死亡6%負傷8.4%、救出者近所の人家族83.9%、救出時間2時間以上64.3%、病院への搬送方法救急車20.7%自家用車・バイク・自転車28.7%、搬送時間2時間以上31.7%、搬送後治療までの時間2時間以上22.8%、入院期間31日以上43%、リハビリ県外施設25.7%、障害部位下肢70.1%、通院53.9%、医療費の負担重い44.7%、相談相手家族75.1%誰もいない9.2%、行政の相談窓口知らなかった59.8%利用しなかった63.2%。

ここから見えることで特に注目したいことは、震災から17年目を迎えた今、悩みを聞いてもらったり相談出来る人が、家族であり誰もいない合わせて85%にも達しているということである。震災障害者の置かれている過酷な状況が見えてくる。

④ 当事者・家族が求める行政施策と「集い」のあり方

i：震災障害者の実数を把握すること。一

体、どれほどの人が後遺症に苦しんでいたのか、また、今なお孤立無援の生活を余儀なくされているのかこれ以上「孤立無援の生活」を送ることがないためにも実数を把握する。

ii：震災当初から本人・家族が今後の生活のあり方や悩みを相談できる総合窓口の設置。

iii：当事者と一緒に生活上のことを考え、行政の窓口になる専任担当者の配置。

iv：癒しの場としての「集い」の継続と充実。今も孤立無援で生きている震災障害者に「あなた1人ではない」と伝え「集い」に参加してもらうことを願っている。

三つの集いの場、「当事者・家族全員が集う場」「仲の良い人同士がじっくり話すことが出来る集いの場」「医療・教育関係者など支援者との集いの場」。

v：世界から震災復興の過程や教訓を学びに来る「人と防災未来センター」に震災障害者のコーナーはもちろん記録も言葉もない。今後起こりうる自然災害に、阪神淡路大震災の震災障害者の教訓を生かすためにも震災障害者のコーナーを設置。

vi：「災害障害見舞金」の場合、お見舞い金である以上、1級障害のみではなく手帳所持者全員に広げるべきであろう。もちろん、震災起因で知的・精神障害となった人にも手渡せるようにする。国はあなたを見捨てていませんよ、とのメッセージである。このことは何より当事者・家族に安心感を与える。

vii：自宅全壊、仕事に就けない、医療費・介護タクシーの費用など生活を立て直し、生きていくために必要な継続的支援。既存の施策を利用し足りない場合は補てんする。

viii：震災障害者への施策は、各自が前向きに生きることが出来るまで続けていく。例えば10年程度の期限を想定する。

5 さいごに

3年前、死者・行方不明者9万人を出した中国四川省の震災映像を見た。その中で「命をとるか両腕をとるか」と迫られ、両腕を切断した少年の姿が、今も目に焼きついている。今、彼はどのようなのだろうか。その四川省から2010年4月に片足を失った少女が来日、2011年1月には、死者行方不明者20万人を出したハイチから、片足を切断した少女が来日、震災障害者との交流会を持った。国は違っても自然災害で障害者となった人々との交流が、互いに歩む今後の人生に少しの力となるなら『出会いの場』を持続していきたいと思う。

天災という不慮の事故で中途障害となった震災障害者。彼らは自らの努力で生き紡いできた。毎日新聞社が2年前、実施した震災障害者への実態調査によると、8割が公的支援の見直しを訴え、7割が生きがいを失ない、4割が自殺を考えたところ。昨年暮れから、兵庫県・神戸市は328名への実態調査を始めたが、具体的施策はまだ見えない。国・県など行政は、個人の努力に任せるのではなく、今回指摘した支援策を早急に講じるべきである。

阪神・淡路大震災から17年目を迎えた。だが、今も多数の震災障害者は置き去りにされたままなのである。

6 資料

2009年11月、神戸市が「震災障害者少なくとも183名」と公表した、その2カ月後の1月17日、神戸市長は震災障害者と支援者と会った。この時、当事者・支援者からの要望書と3名の当事者・家族からの文章を受け取った。その文章の全文を掲載する。

- ① 生後2カ月の時、ベビーベッドの上にタンスが倒れてきたために、娘が重い障害者となった。「今も変わってやりたい。あの時、あと2秒あれば娘を助けることが出来たのに……」との日々を送る両親の手紙。

市長 様

震災当時、生後2カ月でタンスの下敷きになり障害を負った娘も中学校3年生の15歳に成長しました。この15年、言葉にはいい表せない様々な事がありました。障害者としての行政の対応は形式的であり孤独感を感じても、決して勇気づけられるものではありませんでした。震災で障害を負った事を忘れないと前に進めない状況の中、新聞やテレビでは町の復興や式典、記念の建物を見る度に、震災で障害を負った人の存在が見えず「何が復興や」と悲しい気持ちになりました。行政に対して、震災で一度に何十人、何百人と障害を負い、その障害と闘っている人を既存の枠組みの中でしか対応しないのであれば、復興に関してのことは全て既存の制度で対応していきますと発言して、行政は震災の対応をしないでしょう。

今回、皇太子御夫妻や総理が神戸に来られるのも、神戸の人々を勇気づける為に来られるのではないのでしょうか。自分ももし行政の立場であれば、建物の建設よりも災害で障害を負い、今も戦っている人の為に何か出来ないかを考え、勇気づける行動をしたいと思います。

決してお金の面とかではなく、行政が何かしてあげたいという心を持ってほしいだけです。

先日、ニュースで市長から震災障害者に対してのお話をお聞きし、少し震災障害者の事を考えてもらえる時がきたと複雑な思いになりました。今後も震災障害者に対して目を向けて頂ける事を強く願いたいと思います。

- ② 60cmの狭い空間に18時間閉じ込められ、偶然通りかかったレスキュー隊に救出された。だが、急性心不全・腎不全となりクラッシュ症候群の後遺症で今も苦しんでいる当事者の手紙。

神戸市長様

阪神淡路大震災15年目の本日多忙のなか、私達震災障害者との懇談の機会を持って頂きありがとうございます。

昨年11月19日神戸市は183名の震災障害者を正式に認定し発表されました。また、12月には全国の行政として初の震災障害者の実態調査に取り組む「専門委員会の発足」またその「予

算の計上」等今後の方針を発表され、支援の第一歩としてコンサートへの招待を実施して頂きました。

福祉局の皆様の尽力に感謝すると共に市長様の「震災障害に対する理解は過去は十分ではなかった」とのご発言に今後は十分理解したうえで、多く居られるであろう孤立してきた震災障害者への救済、支援を期待致します。

震災の障害者は被災当時の様々の障害を残しています。多くの重傷者は市外県外への移送により、当初から孤立感を持つ事となり、長い入院生活を終えた時、残った障害を退院時には復興に向けた出遅れ感に絶望致しました。

一瞬で全てを失った思いと、ままならぬ自分の体に悔しさが込み上げた事を思い出します。

私自身、全く救出困難な状況からテレビでは死亡者として流れた後の救出となりました。

崩れて来た壁のガレキに体をはさまれ頭上に落ちたコンクリートの壁の下 50 センチ余りの高さの所で立て膝座りで頭も挟まり呼吸もままならぬ中、18 時間後和歌山県田辺消防本部のレスキュー隊の救出を受け東神戸病院に入院、血圧が下がり血中酸素も少なくかなりシビアにして県外への移送として杭瀬へ、更に千船への入院となり「急性心不全」「急性腎不全」「クラッシュ症候群」となりました。

生命に関わる部分のみの治療が優先することで座滅した臀部の治療が遅れ、臀部に座骨神経を巻き込んで癒着し、大臀筋が石灰化を起こし 4 年後は大臀筋が大きく消失し、4 年間は座ることや寝るのも大変な状況でした。

私にとって今一番の苦痛は、消失した大臀筋の為に排便に障害があることですが、現在の障害の認定制度の中では、前例のない事が起きて居り本当に気の毒と医師から言われています。

今年 2 月か 3 月、CT スキャン等再度精密検査をし自分の記録として残します。生涯苦痛と付き合っていくしかありません。

震災 4 年後に「控滅症候群の追跡調査」を受けた時、8 名の検査でしたが並んで待つ間お互いの会話もなく重苦しい思いが忘れられません。震災後 11 年目に偶然「よろず相談室」主宰の牧氏に会えた事で以後手厚く支援頂くこととな

りました。障害 1 級の方と 2 級の方々の違いはどれ程か、生活の苦労はどれだけ違うのと疑問から今から実態調査をして欲しいと MBS の「ネットワーク 1・17」で申し上げました。また自らの「クラッシュ」の事もあり探して会って見たいと思いつき会って来ました。

今回の神戸市の 183 名の認定は全国行政に先駆け初の英断であり県も追随されました。

未だ多くの孤立されている方々が居られると思います。どうかきめ細かく実態の解明に向けた調査して頂けますよう望みます。

今回 SBS 静岡放送取材を受けた時、災害に備え防災訓練を全国で一番二番に多く行っている静岡で県の防災トップの方に「震災の障害者」について取材を行ったところ「え、どう言うことですか」とその言葉すら知り得なかった事で、震災が起きた後の事を考えると正直怖いですと言われた。大都市で大きな災害が起きる前に神戸市は全国の行政に対し起こり得る被害であると発進して頂きたい思います。

今後「震災障害者」が忘れられた存在とならぬ様、神戸市の尽力を期待を込めて切望致します。本日は誠にありがとうございました。

③ 子どもが中学 3 年の時、震災。ピアノの下敷きとなり救出されたが「3%の命」と宣告された。奇跡的に命は救われたが高次脳機能障害となり、苦労の日々を送る母親から手紙。

神戸市長様

前略、失礼致します。私は Y 子の母、M 子と申します。私事の想いを書き綴ることをお話し下さい。私は 5 歳の頃より若年性の関節リュウマチになり、半世紀、この病気と共に生きてきました。そんな私も人並みに結婚し、3 人の元気な子どもに恵まれました。子ども達さえ元気に育ってくれたら、それが一番と思って暮らしていました。

そして、あの日……。また心がざわめき落ち着かぬこの時期……。15 年目を迎えます。Y 子は当時中学 3 年生、春からの高校生活に夢と希望がいっぱい、瞳をキラキラ輝かせていました。でも、ピアノの下敷きとなり、やっと辿り着いた病院で、12 時間の命と宣告されました。さ

まざまな思いの渦巻く中、奇跡的に生還したY子は、元の元気な姿ではありませんでした。震災が奪ったものは「命」そして次にくるのは「元気な体」です。娘、Y子の夢いっぱい的人生も家族の人生も180度変わり、今へと続いているのです。

天変地異、国が県が市が助けてくれると思っていました。信じていました。でも、この15年、エールを送ってもらえませんでした。1・17宣告でも触れてもらえませんでした。

「元に戻らぬ体のこと」。思いもよらぬ大都市に起きた大地震、混乱は当たり前だと思います。行政の方々の大変さも理解できます。でも、市長さん、この一言はほしかったのです。

「ケガをした人達も頑張って早く良くなって下さい。元気になって下さい」と。

そして「ケガをした人達」に向けて明確に示された、訪ねて行ける「相談窓口」もありませんでした。

Y子は6年後、名古屋のリハビリテーション病院で、なんの支援制度もない福祉の谷間に落ちていると言われる「高次脳機能障害」という一生背負ってゆかねばならない障害を受けたのだとわかりました。Y子は行政からも気付かれず受けた障害も支援がないダブルの辛さを味わってきたのです。「死ぬこと」は一生懸命に考えることが出来ました。でも「生きて行く、この娘と……」となると何も考えることが出来ませんでした。本当に辛い苦しい日々が続きました。今、私達がここに居れるのは、その時どきに出会えた方々の支えがあったからです。

Y子のこれからについて、まったくゼロからの出発でした。現在もこれからの生活に不安はいっぱいで、心休まることはありません。

すっかり人が変わったY子ではありますが、心の奥深く「優しさ」「明るさ」は失わずにいてくれました。人生のうちのたぶん一番楽しく輝けるであろう10代、20代を試行錯誤の中で親子共々、悩み、泣き、笑いながら生きてきました。

こんなY子の経験を、こんな大変な経験なのに、これからの教訓として伝えてもらえないのでしょうか。

全世界、全国の人達が震災を学びに来る「人と防災未来センター」にも残してもらえないのでしょうか。どんな形でも考えながら是非貴重な教訓として残してください。お願いします。

「震災障害者」その響きはやっぱり悲しく、苦しく、辛いけれど頑張って仲間の皆さんと共に乗り切って生きて行きたいです。もう私達のような思いをすることがないように、よろしく願いいたします。体の傷と心の傷を支えて下さい。ハード面での復興は目に見えて立派に出来上がってきますが、人も元気になってゆかねば、真の復興とは言えません。

Y子は、旧神戸中央市民病院（現、新神戸）で小雪のちらつく中、昭和55年2月8日に生まれました。神戸で生まれた「神戸ッ子」だと、神戸が大好きで2000年に20歳になること楽しみにしていました。神戸の百貨店に勤めるのだと、神戸商業を受験することになっていました。海と山とに囲まれた、このおしゃれな街が好きだと今も言います。

そんな神戸を愛するY子のことを、どうぞ忘れずにいてやって下さい。自分勝手な気持ちのままに書きました。

乱筆乱文お許し下さい。15年を筆に乗せて 母
平成22年1月17日

追伸

勝手ながら、3年目、やるせない思いを一気にかいた手記と10年目、Tさんに背中を押して頂いて書いた手記、そしてまだ仮設で暮らしていた時のことを載せて頂いた本のコピーをお届けしたいと思います。お手紙と重なりますが、私の変わらぬ思いを受け止めて読んで頂けると嬉しいです。

震災障害者となって15年……、元気で暮らした15年を越えてこれからは時を重ねて生きてゆくY子です。



よろず相談室の集いで遠出を楽しむ震災障害者や支援者＝兵庫県西宮市で 2010 年 5 月 16 日

